中国に学ぶ小学校英語活動
－大連市東北路小学視察報告を中心に－

須　部　宗　生

1．はじめに

2011年度より日本でも小学校英語活動が必修化されることは周知の事実である。この結果小学校はその準備に忙殺されている。しかしながら、必ずしもその成果は十分に上がっているとは言えない状態である。それどころか、やや見切り発車的に開始が決定した小学校英語活動を取り巻く環境は、むしろ厳しく先の読めない現実に晒されていると言っても過言ではない。各小学校の教育現場では英語活動必修化への対応にかなり苦慮しているという事実は筆者が以前見届けたとおりである[1)]。以上のような状況の中、筆者は科研費の助成を受け、2009年９月に中国大連市にある東北路小学を視察訪問した。小学校における公式的な英語教育を開始して10年以上になる中国での英語教育を見届けることで、小学校英語活動を目前にして揺れる日本の教育現場のためのなんらかのアドバイスやヒントが見つかるのではないかと考えたからである。そこで本論では、中国の教育一般を概観することから論を起こし、特に今回の視察報告を通して日本の小学校英語活動の将来を考えてみる。

2　中国の教育

まず中国の教育の実態及び教育制度を資料によって概観してみる[2)]。中国の義務教育は６歳から15歳までの９年間で、日本の小学校に相当する「小学」と呼ばれる６年間の初等教育と、日本の中学校に相当する「初中」と呼ばれる３年間の前期中等教育で構成される。この義務教育の後には、「高中」と呼ばれる一般高校と「職業中学」と呼ばれる職業高校が続く。大学進学を目指す者は「高中」に進み、大学進学ではなく就職を考える者は「職業中学」へと進む。また職業中学から中等専門学校に進み、その後就職する者もいる。一般高校の中には日本の進学校にあたる「重点校」があり、いわゆる一流大学への合格者は、この重点校の卒業者が多数を占める。

中国では総合大学を「大学」と呼び、特に専門性の高い教育を行う大学を「学院」と呼ぶ。例えば、今回筆者が表敬訪問した大連外国語学院などもこれにあたる。大学入学試験は毎年７月に全国同時に共通問題によって行われる。大学進学率は最近特に上昇傾向が目立ち、2005年で約21パーセントに達し、2010年には25パーセントに達すると予想されている。受験競争はかなり厳しく、大都市圏では「１人っ子政策」の影響もあり、特に進学率が高い。

1978年以降の改革解放政策により、教育は重要な政策的課題とされた。現在は創造性を中心に据えた「資質教育」の全面的推進が打ち出されているが、初等・中等教育における最重要課題は今も、1986年に法制化された「９年制義務教育の普及と非識字者をなくすこと」である。2006年には義務教育法が大幅に改正されその充実が図られた。また2007年５月には教育に関する「十一・五」計画が制定された。

3　視察背景

今回の視察は何人かの協力があってはじめ

1)　須部宗生「日本における小学校英語活動の展望－２年後に迫った日本の小学校英語活動を実りあるものとするために－」静岡産業大学論集『環境と経営』第15巻第１号2009年６月pp.15-16

2)　http://www.mofa.go.jp/mofaj/world/kuni/0601china.html

て実現したものである。著者の旧知の仲である某大学教員の中国人の同僚のお世話によって、まず筆者が今回表敬訪問することとなった前述の大連外国語学院の副学長である任徳成先生を紹介された。そして、またその任先生の労により今回の主たる視察訪問先である王校長が紹介されたのであり、その王校長の許可を頂き、はじめて中国における小学校英語授業視察が実現したのである。最初に、ここで今回の視察対象の小学校自体が存在する大連という町を概観することにする。なぜならこの町、大連と東北路小学の英語教育には、なんらかの関係があると思われるからである。

３－１　大連という町

大連は北京や上海ほどではないが人口およそ500万人を擁する大都市である。視察訪問のために離日したのは2009年９月27日の日曜日であった。名古屋空港からおよそ３時間弱で大連空港に到着した。大連空港を出て約40分ほどで到着したホテルはちょうど大連駅の真正面にあった。大連駅と言えば、言わずと知れた旧日本軍が建設した「満州鉄道」の始発駅である。街を歩くと、大連は歴史の街だと至る所で実感する。車で１時間ほど走れば日露戦争の激戦の舞台となった、「203高地」もある。大連の街の一角には、その激戦を戦った日露双方による統治を物語るように、「旧日本人街」と「旧ロシア人街」がある。そしてこれは翌日「東北路小学」を訪問してはじめてわかることになったのだが、訪問先の小学校の校舎自体が旧日本軍によって建設されたものであった。また大連は渤海に面して位置している関係から大規模な国際港があり、海上貿易が盛んであったことが影響してか、外国語教育には昔から力点が置かれていたようである。東北路小学の外国語教育もこの大連という町の国際的な歴史や特徴と深く関連していると思われるのである。

３－２　東北路小学・英語教育

東北路小学は、地理的には北朝鮮、ロシアに比較的近く外国との取引も盛んであったと考えられる。また歴史的にロシア及び日本による統治も経験している。このようなことから外国語教育の伝統も長く、今でも年配の人たちの中にはロシア語や日本語を理解する人もいるようだ。このような環境の中で、東北路小学では全国に先んじて1975年に早くも英語教育が３年生以上を対象に開始され、2000年からは１年生から全児童を対象に実施されている。また当校には教員が55名いるが、小学校とは言っても中国人の英語専任教員が5名いて英語教員専用の教員室が与えられており、英語教育が盛んであることを物語っている。１～３年生は、週２回の中国人教員による授業を受け、４年生以上は週４回の中国人教員の授業に加えて、週１回の英国人による授業を受けている。クラスサイズは「１人っ子政策」の普及にもかかわらず、大都会の人口の大きさが影響してか、日本より大きめで45名以上いるクラスが多いようである。また教科書に関しては国家管理の下で作成された国定教科書が用意されている。

４　視察

約束どおり翌日の９月28日（月）の朝、特に早く視察に向かった。というのは、中国の小学校では毎週月曜日の朝執り行われると聞く「国旗掲揚式」なるものを見学する目的があったからだ。月曜の朝ということもあり多少道路が渋滞していたが、何とか間に合って７時半ごろには無事に到着した。東北路小学の校門に降り立って、まず驚いた光景が目に飛び込んだ。それは親に付き添われて登校する児童の姿だった。さすがにこれは「１人っ子政策」の影響なのかと感心した。さらに後で気づいたのだが、一部の保護者は間もなく校庭で繰り広げられることとなる児童による「国旗掲揚式」をずっと門の外から見守っていた。どうやら中国人の保護者の教育に対する情熱はかなりのものがあるのではないかとの感心させられた。また同時に感じたのは国旗掲揚式の素晴らしさであった。確かにこの壮観な式は見ごたえのあるものであった。せっかく朝学校へと送ってきたわけであるから、時間があればこの式をついでに見学してみようと保護者が考えても不思議ではない。当然

以下本論である、実際の英語授業を報告するわけだが、授業そのもの以外に著者が見たもの、即ちここでは「国旗掲揚式」なるものにまず触れてみたい。なぜならそれが中国の教育の持つダイナミズムとも源ではないかと思えたからである。

４－１　国旗掲揚式

朝校門をくぐり守衛に、今回の訪問の目的を、同行した筆者の大学で学ぶ大連出身の学生の王君を通して告げた。間もなく英語担当の中国人女性教員が出迎えてくれた。彼女はきれいな発音の英語で応対したくれた。次に王校長に面会した。王校長は英語を話す習慣がないようで、通訳を通して、今回の訪問視察を許可してくれたことに対しお礼を申し伝えた。しかしそこでゆっくり話している暇もなく、「国旗掲揚式」なるものを見学するために校庭への案内された。この国旗掲揚式は日本ならさしずめ「朝礼」といったところだが、両者の間には違いがあるようだ。それは、中国全土の小学校で毎週月曜日の朝執り行われる、国旗掲揚式はほぼ全体が児童のみによって運営されている点である。この点で教師主導で行われる日本の朝礼とは異なる。日本の朝礼では必ず行われるはずの校長の講話は中国の国旗掲揚式にはない。この日の王校長もこの式では終始黒子に徹していた。式は約25分くらい続く。校庭にクラスごとに整列した全学児童が見守る厳粛な雰囲気の中、文字通り「一糸乱れる」正確さで進行する。正直な話、今回の主たる目的である英語授業視察が始まる前に、この式を見学して、すでに強烈かつ衝撃的なカルチャーショックに見舞われてしまったと言っても過言ではない。この式に象徴されるものが中国の教育自体、そして英語教育活動の中にも歴として生きているのではないかとつくづく考えさせられたのである。この式では、児童の代表が中国国家に対する愛国精神を訴える詩を朗読する。そのリズムの美しさには中国語がまるで解らない著者にも心打つものがあった。この詩を高々と朗読していた児童も、またブラスバンドの伴奏に合わせて大声で中国国歌を斉唱し、青い空を上がっていく赤い中国国旗を熱いまなざしで見上げ、敬礼する児童も、後の英語の授業参観で再会することとなるが、この国旗掲揚式による愛国教育とも呼ぶべきものは、そのイデオロギー的な意義の是非はともかく、少なくとも英語教育を初め中国における、すべての教育活動に対してもプラスの影響を与えているのではないかと感じた。日本でも筆者が小学生だった頃はこの中国で見られるような国旗掲揚を伴う朝礼があり、それが集団の規律とか集団行動を訓練する場として機能していたと思われる。しかし残念なことだが、最近の日本の児童の中には整列し人の話を静かに聞いたりするのが苦手で、授業にも集中できない児童も多いと聞く。これは日本の学校において集団規律を教える場が減少していることと無縁ではないのではないかと、つくづくこの国旗掲揚式を見学して思われた。

４－２　英語授業

学年別編成による、合計４つのクラスの授業を参観した。本校の英語授業はすべて40分間で、どの授業も英語専門担当の教員が担当している。日本でよく見かける、英米人などとの共同授業形式である、いわゆるティームティーチング形式はみかけなかった。ただ高学年には前述のように別枠で英国人教員による単独授業もある。また英語授業では、特別の必要がある場合を除き母語の使用を避け、どの先生も英語で行っている。筆者が今回の参観を通し特に印象に残った英語授業の特徴を４つ挙げてみると以下のとおりである。

１）音声の重視
２）テンポのよさ
３）競争原理の導入
４）愛国教育の導入

では実際の授業の中で具体的に見てみることとする。例えば、５年生の ‘I’m going to study maths[3] in the morning.’の授業の流れを活動順に確認する。

3）　通常日本では米語法の math が使われるが、中国では英語法の maths が頻繁に使用されているようだ。

1）教師による本日の「ターゲットセンテンス」(Q&A）の板書

What are you going to study in the afternoon? - I'm going to study maths and P.E. in the afternoon.

2）教師による口頭導入

We study many subjects in the morning and in the afternoon at school. We study maths, Chinese, art, science, English, P.E., etc. We study English, science and art in the morning, and maths, Chinese and P.E., in the afternoon.

Now, everybody, what subjects are you going to study in the morning? What subjects are you going to study in the afternoon?

3）指名された児童と教師によるモデルＱ＆Ａ

Ｔ：　What subjects are you going to study in the morning?

児童：I'm going to study science and art in the morning.

Ｔ：　OK, and what subjects are you going to study in the afternoon?

児童：I'm going to study maths and P.E., in the afternoon.

4）児童全体のコーラス練習

教師の指示：　Listen and repeat.

1．Ｔ：　What

児童：What

Ｔ：　What subjects

児童：What subjects

Ｔ：　What subjects are you

児童：What subjects are you

Ｔ：　What subjects are you going to

児童：What subjects are you going to

Ｔ：　What subjects are you going to study

児童：What subjects are you going to study

Ｔ：　What subjects are you going to study in the

児童：What subjects are you going to study in the

Ｔ：　What subjects are you going to study in the morning?

児童：What subjects are you going to study in the morning?

2．Ｔ：　I'm going

児童：I'm going

Ｔ：　I'm going to

児童：I'm going to

Ｔ：　I'm going to study

児童：I'm going to study

Ｔ：　I'm going to study science and art

児童：I'm going to study science and art

Ｔ：　I'm going to study science and art in the

児童：I'm going to study science and art in the

Ｔ：　I'm going to study science and art in the morning.

児童：I'm going to study science and art in the morning.

5）教師が列を指名し、列ごと起立しての「ターゲット•センテンス」のコーラス

6）教師が児童の男女を指名し、性別ごと起立しての「ターゲット•センテンス」のコーラス

7）隣の児童とのペアワークによるQ&A

児童１：What are you going to study in the morning?

児童２：I'm going to study science in the morning.

児童２：What are you going to study in the morning?

児童１：I'm going to study art in the morning.

8）児童の自主的挙手による教師とのQ&A（約10名ほどが競って挙手）

9）教師による児童のランダム指名によるQ&A（約10名ほど）

10）列毎のQ&A競争（ボール送りゲームの原理による）

1番目の児童：What subjects are you going to study in the morning?

2番目の児童：I'm going to study science in the morning.

（3番目の児童に向き直って）：

What subjects are you going to study in the afternoon?

・
・
・

（7番目の児童は折り返して同様のQ&Aを6番目の児童に送る）

・
・
・

（最前列の児童は自分の応答が終わると同時に挙手をする）

この授業活動での大きな特徴は、徹底した「パターンプラクティス」である。ややもすると、日本ではパターンプラクティスは古い構造主義として時代遅れ的であるとして排除する傾向もあろう。しかし特に英語の基礎力の育成には、このパターンプラクティスはかなり有効な練習手段だと思われる。荒木もその著で、「コミュニケーション能力の基礎力の土台となるものは、オーラルイントロダクションやパターンプラクティスなどの練習的な活動であり、これらを十分伴わないと、真に将来性のあるコミュニケーション能力育成への発展は期待できない」[4]と述べている。またラドーも「新しい言語を学ぶためにすべきことは、言語のパターンを口頭練習するという潜在意識的な習慣の確立である」（筆者訳）[5]とパターンプラクティスの重要性を強調している。そして筆者が中国で見届けたものも、あくまでも、愚直なまでの徹底的なパターンプラクティスであった。まず教師が黒板にターゲットセンテンスを書き繰り返して音声による定着を図っている。しかもその繰り返しはかなりテンポがよく、ほとんど児童に休む暇を与えることなく続く。まるで卓球のラリーのようである。しかもそのラリーのやり方に教師が幾つかのバリエーションをつけて工夫している。例えば、ランダムに児童を指名して言わせたり、児童に挙手させて自主的に言わせたり、教師が "Boys!" "Girls!" などを言うと、男子児童が一斉に起立して言ったり、女子児童が一斉に起立して言ったり、教師が列を指定するとその列全員が起立して言ったり、また各列の児童が列ごとの対抗リレーを展開する。すなわち、全員起立して、一番前に立っている児童が次の二番目に立っている児童に向き合い、"What subjects are you going to study in the morning?" と聞きそれに対して2番目の児童は "I'm going to study English in the morning." などと答えたかと思うとすぐ次の児童に向き直り "What subjects are you going to study in the afternoon?" と聞く。これがあたかも「ボール送りゲーム」の要領で進んでいき、最後の児童まで行き着くとそこで折り返して前に戻ってくる。こうすることで児童は何度もターゲットセンテンスのパターンプラクティスを行うこととなる。まさにテンポのいい、音声重視のパターンプラクティスが大規模クラスで効果的に行われている。また、教育効果を挙げるには別の要素の導入もあるようだ。即ち競争原理の導入である。このボール送りゲームは列の一番前の児童が答えると同時にその児童が手を高々と上げる。その手が一番早く上がった列が優勝チームとなり、一番遅く上がった列が最下位となる。その優劣が、このゲームが終わると先生によって宣言される。一番になった列の児童は飛び上がったり歓声を挙げて喜びを表す。逆に最下位になった列はがっかりとうなだれる。その上罰として先生からもう一度質問と応答のやり直しをさせられる。しかしそこには特に険悪な雰囲気はなく、最下位の列のやり直しが終わると全員が拍手で迎えるといった具合

4）荒木秀二『中学校若手英語教師の指導テキスト』明治図書　2006　p.79 ll.1-4

5）Robert Lado, Charles C. Fries *English Pattern Practices* The University of Michigan Press 2004　p.15 ll.5-7

である。担当教員も皆を大げさに“Very good!”とか“Good job!”などと言って褒めるのである。しかしそこに歴然と見られたのは一種の競争原理の導入である。最近の日本の小学校では児童を競わせることを避ける傾向もあると聞く。しかし、この何気ない競争が児童の活動を促しているという単純な事実に改めて教えられる思いがした次第である。

また別の６年生のクラスでは、以下のキーセンテンスの音読であった。

The Chinese people are very clever.
（中国人は大変賢い）
The Chinese people invented paper.
（中国人は紙を発明した）
The Chinese people invented the printing machine.
（中国人は印刷機を発明した）

この音読にしても日本ではあまり行われなくなったものではないかとも思われるが、ともかく筆者の見た授業ではひたすら教科書の音読をするという活動であった。この音読の効果に対しては学者の中でも否定的な見方をする者もいるようである。しかし荒木も「徹底した音読」[6]の重要性を強調しているように、筆者はこの音読の英語教育現場における復活を願ってやまない。ある人は中国の小学校の教え方は多少時代遅れではないかと指摘する。しかし中国の小学生のひたむきな繰り返しと音読の声の大きさには、我々も学ぶ点が多いと思われる。当然のことながら、日中では文化も歴史も大きく異なり教育の分野でも差があるだろう。特に英語授業におけるテンポのよさには、国旗掲揚式で垣間見られた、「国威発揚」を目指す愛国教育的集団主義教育という中国独特の効果が存在するのではないかと感じた。おそらく、この「中国人は印刷機を発明した」というキーセンテンスにしても、日本人あるいは世界の大方の人々の一般的な理解では、印刷機はグーテンベルグによって発明された、となるであろう。故に中国のこのような教育自体が客観的ではなく偏ったものだとして批判する見方もできよう。しかし、中国では英語の教科書の中でも中国の歴史や中国人の優越性を強調することで、自国に対する信頼や敬意の念を効果的に児童に植え込んでいるようだ。教室内部の壁面には様々なスローガンが飾られている。教室の前の廊下にも国家的英雄の写真などが貼ってある。毛沢東、鄧小平など政治家を始め、オリンピックで活躍した中国人スポーツ選手、中国産人工衛星で有人飛行に成功した中国人宇宙飛行士、国際的に活躍する中国人芸術家などである。またこの小学校の卒業生でサッカーなどで海外で活躍している選手などの写真もある。さらに、折りしも筆者が帰国した９月30日の翌日に当たる10月１日は「建国60周年」式典の日であり、街には至るところ中国国旗である赤い旗が飾られていた。テレビをつければ、国旗が青空に羽ばたく映像が始終流れているという具合である。まさに国威発揚を目指す愛国教育が国家全体で行われている。北京五輪を成功裏に終わらせた中国は、現在上海国際博覧会を急ピッチで行っているようだ。また、今回の音声中心の授業は新鮮な驚きであった。と言うのは、中国の英語教育はどちらかと言うと、文法中心であるとかねがね聞いていたからである。しかしただ音声重視とは言っても、2011年に正式稼動する日本の英語活動のように、全く書くことを児童にさせないということではない点において、中国の小学校英語教育は異なるようである。書くことは授業の主たる活動ではないものの、児童は授業時に扱ったターゲットセンテンスやキーセンテンスをしっかりとノートに書いている点は印象に残った。またとかく小学校英語活動と言うと、ゲームを取り入れることばかり考えがちだが、今回の大連の小学校ではゲームを活用する要素はあまり見かけなかった。しかしゲーム自体は使っていないのだが、前述のように授業運営に競争原理をゲーム的に取り入れることで授業を活性化している。当然日本と中国では国情が異なるゆえそのままそっくりすべてを導入することは難しいかもしれない。しかし、筆者も2009年に国内の

6）荒木秀二『中学校若手英語教師の指導テキスト』明治図書　2006　p.118 l.4

複数の小学校の英語活動の場を見る機会があったが、余りにも日本ではゲームを安易に導入しすぎていると感じられなくもない。そして、このような安易なゲームの導入によって、かえって授業の目標がぼけたり、児童の興味が逆に失われる結果になる危険性を感じたのである。適切な内容の学習材料を適切なタイミングで適切な緊張感の中で与えてこそ、児童の知的興味が維持され、授業の効果が上がるのではないかと反省しなくてはならないと感じた。

４－３　英語授業担当者とのインタビュー結果

授業参観の後昼食を共にしながら英語の授業担当者にインタビューを試みたが、以下にその実際の質問そのものとそれに対する先生方の回答結果をまとめたものを挙げる。

Ｑ１．あなたの教職経験年数はどのくらいですか。

Ans. ピピン先生、１年。レベッカ先生、13年。ソフィア先生、16年。ヘレン先生、７年。ナンシー先生[7]、20年。平均教職経験年数、11.4年である。

Ｑ２．あなたが担当する英語の授業数は週何回ですか。

Ans. 全員の先生が一律に１コマ40分の英語授業を週14コマ担当している。

Ｑ３．あなたは英語の授業を１人で担当していますか。誰と担当していますか。

Ans. 全員の先生が基本的に１人で授業を担当し、特別な必要に応じ、例外的に英国人講師の応援を要請する。

Ｑ４．あなたが担当する英語授業のクラスサイズはどのくらいですか。

Ans. 通常45名ほどであり、年度によっては50名を超える場合もある。

Ｑ５．毎日忙しいと思いますが、あなたが１回の英語授業の準備にかけている時間はどのくらいですか。

Ans. １回の授業に平均20～30分ほど、主としてレッスンプランの確認などをする。また英語担当教員全員で月に１回、約半日を費やして準備する機会が別にある。

Ｑ６．それぞれの学年は週に何回の英語授業がありますか。

Ans. １年生～３年生は週２回ある。４年生以上は週３回の中国人英語教師の授業に加え、週１回の英国人講師による授業がある。

Ｑ７．あなたは小学生の次のどのような英語能力を特に育成したいですか。

１．読む力　２．書く力　３．話す力
４．聞く力　５．その他（　　）

Ans. 全員の先生が特に「話す力」と「聞く力」の育成を目指している。

Ｑ８．あなたは小学校で英語を教えていて最も大変だと思うことは何ですか。

Ans. ほとんどの先生がクラスサイズが大きすぎる問題を指摘している。

Ｑ９．あなたは自分の英語力を強化するために何をしていますか。

Ans. 全員の先生が自己研修として自分の英語を話す能力の伸展を目指している。

Q10. あなたは英語教育のために研修会に参加していますか。その主催団体はどこですか。

Ans. 全員の先生が毎週火曜日の午後２時間、国家運営のよる研修を受けている。

Q11. 中国の小学校英語教育担当者の研修は十分ですか。もし十分でないと考えるのならどのような研修の必要性を感じますか。

Ans. 全員の先生が研修はまだ十分ではないと認識し、特に「外国研修」及び「外国文化を学ぶための研修」の必要性を感じている。

Q12. あなたが小学生に英語を教えることで期待する効果は何ですか。

１．国際感覚や国際的視野の育成
２．自国文化の再評価
３．国際交渉力の育成
４．豊かな人間性の育成

7）このように、中国の女性には自ら英語名を名乗る人が多いようだ。中国人の人名の中国語発音が覚えにくい外国人にとってこの英語名は救いである。

５．その他（　　）

Ans.　全員の先生が「国際感覚や国際的視野の育成」と「国際交渉力の育成」を重視している。

Q13.　授業の中で母語である中国語をどの程度使いますか。

Ans.　全員の先生が重要な概念やキーワードの事前説明には母語を使用するが、実際の授業活動には母語の使用を極力避けている。

Q14.　「英語嫌い」の児童はいますか。

Ans.　一部の先生がどのクラスにも数人ほど英語嫌いの児童がいると考えている。

Q15.　英語の宿題は出しますか。

Ans.　全員の先生が必要最小限の宿題を出している。

Q16.　この小学校にはこの地区に住んでいる児童なら誰でも入学が出来ますか。

Ans.　教区に居住している児童なら誰でも入学が可能である。

Q17.　この小学校の児童はどの程度英語塾に通っていますか。

Ans.　約半数の児童が英語塾に通っている。

４－４　まとめ

以上の英語授業担当者に対するインタビューに引き続いて学校の責任者としての立場にある王校長にも単独インタビューを通訳を介して行った。以上２つのインタビューの結果に実際の授業参観の感想を加え、まずいくつか特に印象に残った点を列挙してみると以下のようになる。

１）英語専任教員による英語教育体制の確立
２）英語教員のための研修制度の充実
３）週14コマ（１コマ40分）に制限された英語教員の勤務条件
４）全教員の意思の統一性
５）１年生から６年生まで全学年対象の英語教育体制
６）児童に対する必要最小限の評価の実施
７）英語授業時にクラス担任が教室全面に位置し授業全体を掌握するやり方
８）１人っ子政策からか親の熱心さが伺える授業

では以上の点に関して順に考えられることを述べてみたい。まず１）２）３）は相互に関連していると考えられる。筆者が訪問した小学校の場合には、英語の授業はクラス担任が担当していない。さらに英語授業担当者が他の教科を兼ねて教えることもない。英語授業担当者は完全な英語専任教員である。英語担当教員には毎週火曜日が研修のための日と設定されており、校内及び校外にて英語教員専用の研修を受ける体制が確立している。加えて実際の担当授業数は３）で示したように、かなり恵まれた勤務条件だと思われる。さらに彼らの給与面での待遇に関して質問したいと考えていたのだが、このような質問はあまりにぶしつけで礼を逸するのではないかと躊躇してしまった。今となっては残念ではあるが、一般的に聞くところでは、中国の小学校の先生の給与は、中国の一般的なサラリーマンのものに比べ特に高いものではないようである。しかし今回の訪問で見た限りどの先生も英語教員としてのプライドと使命感をもって教育にあたっていると強く感じられた。

４）の全教員の意思の統一性を強く感じた。どの先生にインタビューしてみてもほぼ同じ答えが返ってくる。これは中国という国の国家政策が強く関係していると思われる。恐らく先生方が毎週火曜日に受けている研修では英語力向上や授業運営上の研修に留まらず、国家としての統一的な教育理念や教育目標が明確にかつ確実に各教員に伝わる組織的な研修を行っていると推測される。このような中国教員研修視察訪問は筆者のような外国人教員に対して許可されるものか定かではないが、可能ならば中国における教員研修も是非将来的に見てみたい。

５）に関しては、早期英語教育の徹底振りを痛感した。さらに、後の校長とのインタビューで筆者が取り上げた「早期英語教育に対する日本における反対論」に関しての王校長の次の発言が印象的だった。即ち、「日本の早期英語教育に対する強い反対論には理解に苦しむ。わが国にも反対論を唱える人はいるが、あくまで少数派でしかありえない。多くの中国人は早期に児童に英語を教えるべきだと考

えている。英語を早い時期に教えることで、母語の発達が遅れるとも考えない。それどころかむしろ外国語を教えることで、母語だけでなく他の教科の教育にも相乗効果が期待できるはずである。」さらに王校長は次のように持論を展開した。「英語という外国語を学ぶことは、外国に向けて自国の文化を発信するためでもある。この発信を効果的に行うには、自国の文化に対する誇りと愛国の精神がまずなくてはならない。小学生の英語教育によって単に英語の知識やスキルに留まらず、児童に自国文化学習の重要性を認識させることとなる。また児童が英語を勉強することは、外国の人たちが中国のどのような文化に興味を抱いているか知ることに繋がる。その結果、おのずと児童の学習は世界へと開かれたものとなり、英語以外の教科に対する勉学意欲にもプラスに作用する。またどのように説明したら外国人がよりよくわが国の文化を理解してくれるか児童が意識する結果となり、児童の国際交渉能力はおのずと高まる。日本人の英語運用能力や国際交渉能力が中国人のものより劣っているとは私は考えないが、もしそのような指摘があるとするならば、10年ほど前に英語教育を公式稼動した中国とこれから始める日本との差が１つの要因として影響しているかもしれない。」

また６)の評価の問題に関しても王校長は次のように述べた。「必要最小限に評価を留めることで児童の英語嫌いを生む危険性を抑制できるだけでなく、正当な評価をすることは逆に児童の英語学習意欲の増大に繋がるはずである。」因みにバトラー後藤の「アセスメント（評価）と指導、学習は三位一体をなしている」[8]との主張のとおり小学校英語における評価の問題も真剣に考えなければならない時期が来ていると思われる。

また７)に挙げた点は最初は若干の違和感が感じられたのではあるが、いくつかの英語授業を参観したのだが、どの授業にも教室の前面の脇には授業担当者以外に机を構えた別の教師がいた。さっそく付き添いの先生に尋ねると、英語の授業には常にクラス担任が前に居て授業活動を見届け、クラスの児童の様子を掌握しているとのことであった。授業担当者にしてはさぞかし目障りで迷惑なことではないかと思われたが、様子を見ている限りそうでもないようだ。しかし担任は忙しい身であるためか、机に向かって児童のテストの採点をしながら児童の様子を見ている。時々児童に目を向け時に微笑みかけたりしている。その様子は監視するというよりも児童の活動を応援しているようにも見受けられた。いずれにしても、英語のプロではないゆえ実際の授業指導には参加しないものの、クラス担任は常に児童と共に居て皆を見守っていることを具体的な態度で示すことも教育的な活動とも考えられ、中国の小学校英語活動の強みの１つを垣間見た思いであった。

さらに８)にいたっては、特に驚きの念を禁じえなかった。と言うのは、参観したあるクラスの最後部をよく見ると、１人の児童と並んで大人の女性が座って授業を受けているのである。付き添いの副校長に聞いてみると「あの女性は授業内容の理解が遅れた児童の母親で、子どものことが心配で、後に家庭学習の指導をするために学校の許可を得てあのように一緒に授業に参加している。」とのことだった。訪問当日の朝保護者に付き添われて登校する児童を目撃して１人っ子政策の影響からか親の教育に対する並々ならぬ情熱を感じたが、ここでも同じ感が強まったのであった。さらに同時にこれは筆者には正直、ほっと安堵の胸を撫で下ろすという体験でもあった。インタビューでも、授業についていけなかったり、英語嫌いの傾向のある児童がいることがわかった。当然このことを喜ばしいとは思えない。しかし、何もかもうまく行っていて雲の上のものとも感じられた中国の小学校英語教育ではあったが、そっと本音で打ち明けてくれた王校長の言葉に勇気付けられる思いがしたことも事実である。即ち、「今でこそそれなりの軌道に乗った小学校英語教育ではあるが、いろいろな苦労や問題が多くあったり、様々な紆余曲折を経て今がある。」と正直に語ってくれた。

8） バトラー後藤裕子『日本の小学校英語を考える』三省堂 2005 p.215 ll.9-10

5　おわりに

以上中国という国の教育体制を概観した上で中国の大連市東北路小学という学校の実際の視察訪問および英語授業参観・英語授業担当者と校長とのインタビューを通して小学校英語活動を考えてみた。しかし筆者の今回の訪問は中国のいわゆる１大都市にある１小学校の実態に過ぎず、また訪問の時間も短くきわめて限定的である。周知のように、中国は大きな国であり地域による教育格差も大きいと聞く。それ故今回の筆者のレポートが中国全体の小学校英語教育一般を示すものでないことは当然認めなくてはならない。しかしながら今回筆者が見届けたものは、10年ほど前に公式的に導入した中国という国の小学校英語教育の紛れも無い現実を示す１例であることも事実である。そこで終わりにあたり2011年に英語活動の必修化が決定している日本に対する要望を述べてみたい。

まずは国の確固たる統一方針と指導体制の必要性である。文科省の考える英語活動のガイドラインとも言うべき「英語ノート」自体が今一歩踏み込んだ内容となり得ていない感が否めない。それどころかその「英語ノート」も最近の民主党政権の誕生によっていわゆる「事業仕分け」の対象とされたため、現場の教師にさらなる不安を煽る結果となったようである。また授業担当者は英語教育に関しては経験を有しないクラス担任が行うとなっている。しかし小学校英語活動においてそれなりの効果を上げるためには中国で筆者がみたような「英語専任教員」が必要だと思われる。現状のような不十分な人材育成の体制をまず改善したい。さらに仮にクラス担任が英語活動を指導するのならばそれなりの研修体制の充実が必要になってくるはずである。また英語活動の担当教員には他の校務軽減も図られなければならないだろう。筆者の先の考察[9]でも明らかなように、研修の不十分さを痛感している教員が多い。現状のままでは英語活動の地域差、学校間格差が生ずる懸念を抱えたままのスタートとなる。国の統一した指導体制による研修が充実してはじめて中国で筆者がみたような教員同士の意思の統一性が確保できるのではないかと思われる。また「評価はしない」としている現在の小学校英語活動にも疑問に残る。一旦小学校英語活動が必修化されれば、当然中学校との連携の問題も視野に入れざるを得ないだろうし、結果的に高校、大学における英語教育全体を考え直す必要も生じてくるだろう。日本全体の英語教育という大きなパースペクティブに照らした場合「評価」の問題は再燃するはずである。特に中国で実際に会見した、英語教育が専門でない１校長の「評価」に関する自信に満ちた発言は心に残ったのである。今回は中国での小学校英語教育の視察訪問を果たしたわけだが、今後は韓国やロシアなどの現状を調査することで、課題が山積している日本の小学校英語活動に対するさらなる提言を試みたいと考えている。

9）　須部宗生「日本における小学校英語活動の展望－２年後に迫った日本の小学校英語活動を実りあるものとするために－」静岡産業大学論集『環境と経営』第15巻第１号2009年６月p.17 ll.18-30

参考文献等

須部宗生「日本における小学校英語活動の展望－２年後に迫った日本の小学校英語活動を実りあるものとするために－」静岡産業大学論集『環境と経営』第15巻第１号2009年６月
http://www.mofa.go.jp/mofaj/world/kuni/0601china.html

荒木秀二『中学校若手英語教師の指導テキスト』明治図書　2006

Robert Lado, Charles C. Fries *English Pattern Practices* The University of Michigan Press 2004

バトラー後藤裕子『日本の小学校英語を考える』三省堂　2005

文科省「英語ノート」2008

兼重昇『小学校新学習指導要領の展開』明治図書　2008

樋口忠彦『これからの小学校英語教育』－理論と実践－　研究社　2005

望月昭彦『英語科教育法』大修館　2001